

誘惑
トップ・
シークレット

一 冷たい男と縁のない女

今日も犠牲者が一人。

社員それぞれが自由な時間を過ごす昼休み、私が所属する総務部のフロアでの出来事だ。

私から二つほど離れたデスクで、三つ年下の女性社員が、大きなため息をついている。

「やっぱりフラれちゃった……」

「だから言ったじゃない。あの人はダメだって！」

彼女に寄り添う同期の女性社員が小声ながらも強い口調で論じた。

「え、でもさあ……冷たい冷たいって言われてても、やっぱり男じゃん？ 強く押したら断らないかなって……」

「あの人にこっちの常識なんて通用しないのよ。むしろ女を愛せないって噂が本当なんじゃない？」

「でも超格好いいからさあ……」

フラれたという女の子は、がっくりと落ち込んだように視線を落とした。

さて。後輩二人の会話をしっかり盗み聞きしている私——横家未散は、割と大きな企業の総務課で働いているOLだ。

彼女達が話しているのは、おそらく営業部の有名人のことだろう。

笹森柊、二十九歳。営業部でもやり手と噂の人物だ。

少し長めの黒髪をワックスで後ろに流し、涼しげな目元と、スツと通った鼻筋をした綺麗な顔立ちの超イケメン。更に身長は百八センチ以上もあり、スタイルの良さと相まって、ファッションモデルのようだ。

完璧を絵にかいたような笹森さんだが、ただひとつ大きな欠点がある。

彼は、何故か女性社員に冷たいのだ。

こんなに冷たくてちゃんと営業ができるのか？ って思うほど。

男性とは仲良く話をしているのでゲイ疑惑もあったが、さすがにそれは本人が否定したらしい。

そんな笹森さんではあるが、とにかく女性社員に人気があった。

私が入社して四年。部署は違えども、誰が笹森さんに告ったなどの噂だけはバンバン耳に入ってくる。それを聞く度に、みんな物好きだなと思っていた。

私は好きになるなら優しい人がいい。

「あれ、横家さん、新聞読んでるの？」

ふいに声をかけられて私の胸がドキッと跳ねた。顔を上げると、爽やかな笑顔が目に入る。二年先輩の川島研太さんだ。

「あっ、はい」

彼は私の手元を覗き込むと、感心したように声を上げた。

「へえ、意外だなあ。横家さんって新聞読むんだ？」

「はい、結構面白いですよ」

「あ、馬鹿にしてるわけじゃなくて、新聞よりファッション誌とかの方が似合いそうだからさ」
そう言って、くしゃつと笑う。

たわいもない会話を交わし、川島さんは笑みを浮かべたまま自分のデスクに戻って行った。

そんな川島さんの背中を見ながら、ため息をつく。

彼は、私はまだ右も左も分からない新入社員だった頃の教育係だ。いつも優しく接してくれて、他の先輩にミスを叱られたときも、こっそり慰めてくれたっけ。

そんな川島さんに、私は淡い恋心を抱いていたのだ。

けれど彼は、つい最近結婚を発表した。

聞いたときはやっぱり衝撃を受けた。でも、以前から彼女がいるという話は聞いていたし、いつかこの日が来ると覚悟していた。

ただ、好きな人がいなくなっただけ。

自分はどうやら、そういうた色恋沙汰とはほど遠いようなのだ。

初恋の人も、その次好きになった人も優しい人だったけれど、告白もできずに終わっている。気づけば、二十六歳の今まで一度も恋人ができないまま来てしまっていた……

翌日。昼休みになり、お決まりのコンビニで買ったおにぎりとサンドイッチを食べる。その後、

暇を持って余した私はスマホと新聞を持って屋上へ行った。

この時間の屋上は昼食を食べている人だったり、昼寝をしている人だったり、様々な人がいる。屋上の開放感が好きな私は、昼休みの時間が余るとよくここに来ていた。もちろん、他の女性社員とお喋りしたりもするけど、たまには一人で過ごす時間があってもいいと思うのだ。

私は日陰に腰を下ろし、持ってきた新聞を広げつつスマホを弄り始める。

夢中になってwebの経済ニュースをチェックしていると、突然強い風が吹いて、広げていた新聞が飛んでいってしまった。

「あっ！」

風に乗って飛んでいった新聞は、近くで昼寝していた人の上にはさりと落ちる。

私は慌てて立ち上がると、その人のところに向かった。

「す、すみません！」

昼寝していた人は、顔にかかった新聞をむんずと掴むとマジマジと紙面を見つめた。

「経済紙……？」

その人の顔を見た私は、思わずその場でたじろいでしまう。

何故なら昼寝をしていたのは……まさかの有名人、笹森さんだったからだ。

「お、お休みのところ、すみませんでしたっ」

私は急いで頭を下げると、笹森さんの持っている新聞に手を伸ばした。けれど、掴んだ新聞はピクリとも動かない。

「え、あれっ？」

「……これ、あなたの？」

笹森さんが新聞を掴んだまま、そう聞いてくる。

「そうですけど……」

「ふうん」

そう言う笹森さんが、ぱっと新聞から手を離れた。私は新聞をたたんで、もう一度べこつと頭を下げ、屋上を後にした。

「はあ、びっくりした……」

階段を降りながら、ドキドキする心臓を押さえる。

まさかこんなところに笹森さんがいるなんて思わなかった。しかもあんな至近距離で顔を見たことがなかったから、びっくりしちゃったよ。

確かにあんなイケメンそうでもないかも。女性社員が騒ぐのも納得できる。

でも……噂通り冷たそうだった。あれじゃあ、せつかくのイケメンも台なしだよ。

昼休みはいつもここなのかなあ。なんかえらく端っこの方にいたけど。

もしかして、女性社員の目から逃げるためだったりして。

モテる男は大変だね……

でも私は、どんなにイケメンでも彼を恋愛対象としては見られない。

そのときの私は呑気にそんなことを考えていたのだった。

意図せぬ笹森さんとの遭遇の翌日。

「えっ、異動ですか？」

朝、課長に呼ばれて会議室に向かうと、開口一番そう告げられた。

「営業部でアシスタントしてた子が妊娠悪阻で入院しちゃってね。たぶんこのまま産休に入るか、最悪退社しちゃうそうなんだよ。だから、早急に一人アシスタントが必要になってね」

「私、総務から出たことがないので、アシスタントに入っても即戦力にはならないと思うんですけど……」

「あ、大丈夫。営業部によれば、アシスタントを必要としている社員は、凄く仕事のできる人だから、君への負担は最小限で済むって。君、要領いいし、お願いしていいかな？」

いきなりすぎて上手く頭が働かない。

だけど、結婚が決まって幸せそうな川島さんから離れるのもいいか、という考えが一瞬頭をよぎる。気がつけば私は、異動を了承してしまっていた。

来週から異動になるということで、慌ただしく引き継ぎを済ませることになった。

そして異動当日の朝、荷物を纏めて営業部に行く。

事情を話すとすぐにデスクに案内された。

「君にアシスタントしてもらおう社員、もうすぐ来るから。まあ、有名人だからすぐ分かると思うけど」

……嫌な予感がする。

「知ってるよね？ 笹森」

ああ……予感的中！

すでに上手くやっていける気がしない……

私は荷物を持ったまま、しばらくその場に立ちつくしてしまった。

しばらくすると、次々と営業部の面々が入社してきた。

朝のミーティングで、直属の上司である課長から、簡単に私の紹介がされる。続けて「じゃ、横家さんひとことどうぞ」と言われた私は、やや緊張気味に口を開いた。

「総務部から来ました横家未散です。どうぞよろしくお願ひ致します」

ペコリと頭を下げると、よろしく、と周りから声がかかる。

「じゃあ後は彼に指示してもらって」

そう言って課長が視線を向けた先には、無表情な笹森さん。

「……よろしく」

ニコリとせずそう言われ、私も慌てて「よろしくお願ひします」と頭を下げる。

すると彼は、「じゃ、仕事の説明するからこっち来て」と自分のデスクに手招いた。急いで彼の席まで行くと、クルリと向きを変えてパソコン画面を私に向ける。そして、そのまま業務の説明を始めた。

最初に日常業務をざっくり説明した後は、顧客についての説明が続く。

きつと口調とかもキツイんだろな……と覚悟していたのに、意外にも笹森さんは声を荒らげることはなく、教え方もとても分かりやすかった。

「なんだか噂に聞いていた人物像と違うな……」

困惑しつつ、私は所々メモを取りながら一気に仕事を教えてもらった。

「分からないことがあったら、その都度聞いて」

「はい」

「じゃあ、俺出るんで、あとよろしく」

そう言うと、笹森さんはビジネスバッグを持って部署を出て行った。

一気に緊張が解け、思わず息を吐き出しぐったり椅子に凭れる。

「横家さんは笹森君にドキドキしないのお？」

そのとき、斜め後ろから声をかけられた。振り返ると、長い髪を一つに纏めた、眼鏡の女性がこちらを見ている。

「吉村です。よろしくね。私もあなたと同じアシスタントよ」

間違いない先輩んだけど、とても可愛らしい雰囲気の人だった。

「よろしく願います。で、なんですか？ ドキドキ？」

「珍しく、笹森君の近くにいてまったく動揺しないアシスタントは、あなたで二人目だわあ」

「そうなんですか？」

「だってあれだけ顔が良ければ、つい見惚れちゃったりするでしょ？ 少なくとも今までのアシス

タントの子達はみんなポーッとしちゃって、仕事にならなかつたもの。その度に笹森君イライラして、よくキレてたわ〜」

「そ、そうなんですか？ じゃあ、もう一人の人っていうのは？」

「前任者よ。あの子は結婚してたから笹森君に気をとられなかつたのよ。だから長く続いたの」

「……モテ過ぎるつても大変なんですねえ」

「そうねえ。笹森君なりに苦労してると思うわよ〜。でも横家さんとなら上手くやっていけるかもね」

吉村さんはウフフ、と意味深な笑みを浮かべる。

それはどうだろう……正直、あんな有名人と上手くやっていける自信なんてまるでない。

その日は仕事を覚えるだけで精一杯で、気がついたら終業時間だった。

笹森さんは昼に一度帰ってきたが、その後もずっと外回りに出ている。

帰ってくるまで待ってた方がいいのかな、と悩んでいたら、ちょうど笹森さんが帰社した。

「お、お疲れ様です」

「これ、伝票。処理は明日でいいから」

笹森さんは挨拶もなく伝票を私のデスクに置くと、そのまま自分の席に行ってしまった。

……こんな人と上手くやっていくって無理じゃない？

内心で途方に暮れた。そしてなんとなく帰るタイミングを逃した私は、ススッと吉村さんの側に行き耳打ちする。

「あの、笹森さんの仕事、手伝った方がいいですか？」
すると吉村さんも私に耳打ちする。

「たぶん一人でやりたいだろうから、今日は帰って大丈夫よ」

吉村さんのアドバイスに従い、私は帰り支度をして笹森さんの席へ向かった。

「笹森さん、お先に失礼致します」

「ああ。お疲れ様」

吉村さんにも挨拶をして私は部署を出た。

外に出た途端、どっと疲れが押し寄せてくる。

覚えることだらけの仕事内容や新しい人間関係に、いつも以上に気を張っていたようだ。何より、あの笹森さんのアシスタントというプレッシャーに、心身ともにへとへとになる。

これから毎日あの無表情が待っていると思うと気が重くて仕方がない。

はあああ、と大きくため息をついた。

「あー、もう考えるのやめよ！」

こんなときは趣味に没頭するに限る！

緊張と不安でいっぱいだった気持ちを、完全に趣味モードに切り替えた。

そうだ。家に帰れば私には楽しみがある……ふふふ……

家に着くと、途中コンビニで買った弁当を炬燵に置いた。

大学進学と同時に一人暮らしを始めた私は、以来1Kの古いアパートに住み続けている。

六畳のフローリングにかるうじて二口コンロがついたキッチン。そしてユニットバス。

狭いし収納が少ないから、荷物が増える度に実家に送り付けてなんとか居住スペースを確保する
ような有様だけど、住み慣れてるし会社にも近いから引越すつもりはない。

私は部屋着の黒いジャージに着替えると、炬燵に入ってほっと一息ついた。

ジャージは洗濯しすぎて毛玉が凄いことになっているけど、なんだかんだでこれが一番楽なのだ。
とてもじゃないけどこんな姿、他人には見せられないけどね。

買って来たコンビニ弁当を食べ終えた私は、いそいそと炬燵の上のノートパソコンを立ち上げた。
早速開いたページは、ネット証券の口座管理画面。

本日の日経平均株価は昨日に比べて二百円ほど上昇。私が株主優待目当てで買った株価も軒並み
上がっていた。

画面を見ながら、思わず頬が緩む。

そう。私の今のお楽しみは、株式投資なのだ。

一年ほど前、たまたま「十万円からできる株式投資」と書かれた雑誌を見かけたのが、株を始め
たきっかけだ。

ちょうど、想いを寄せる川島さんに彼女がいると知った直後だったこともあり、何か夢中になれ
るものが欲しかった。

その雑誌を買った私は、すぐに他の雑誌やネットでも株について勉強し、晴れてネット証券の口
座を開設したのだ。

最初は、比較的安い銘柄からちまちまと買い始めた。やり初めたばかりの頃は緊張したけど、自分の買った株の値段が上がっているのを見ると、利益はたいしたことがなくても凄くテンションが上がった。

もちろん株価は下がることもある。そんなときは、早目に見極めて損する前に売却するのだ。慣れてくると、これから利益が出そうな業種や会社を知るため、よく新聞を読むようになった。

その日に買った株をその日のうちに売却して利益を得るデイトレードなんかにも興味が出てくるけど、平日は会社があるので、パソコンのモニターにずっとはりついて相場を見続けるなんてできないからね。第一、素人にはリスクが大きすぎる。

だから私が主に購入するのは、値動きが安定している株主優待銘柄だけ。

株主優待制度は、毎年決められた時期にその企業の株をある程度保有していることを条件に、株主が優待を受けられる制度のことだ。もちろん実施していない企業もあるけど、どの企業がどんな優待を実施しているのかをホームページや雑誌で調べているだけでも楽しい。

「いまは、このハムがとっても欲しい……」

私が買っているこの食品メーカーは、株主優待として年に一度ハムを送ってくれる。それもお歳暮とかでよく見る立派な塊かたまりをだ。

一人暮らしてハムの塊かたまりつてなかなか買わないし……ちよつと厚めに切ってハムステーキとか最高だよなあ。

株価のチャートを見ながらそんなことを考えているうちに、抱えていたストレスや明日への不安

なんて、きれいさっぱり頭の中から消え去っていた。

営業部に異動になって数日後。

少し仕事に慣れてきた私に、思わぬ爆弾が落ちてきた。

「え、私も取引先に行くんですか」

「そう」

いつものごとく全く表情を変えずに、笹森さんが言う。

たぶん今、私は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているに違いない。

「あそこの担当者はよく電話してくるし、たまにここにも来るからな。君も顔を知っておいた方がいい」

凄い。笹森さんが割とたくさん喋しゃべった。それに初めて君って言われたよ。

「それじゃあ、十分後、車が出るから」

「は、はい……」

よかった、今日変な服着てこなくて。

うちの会社は制服がないので、内勤の女性社員も私服なのだ。

更衣室で準備をして部署に戻ると、ビジネスバッグを持って待っていた笹森さんが歩き出した。

「行くぞ」

「は」

取引先までどれくらいかかるか知らないが、果たして道中の会話はもつのか。それだけが心配だった……

二人きりの車の中、お互いに何も言葉を発さないまま二十分が過ぎた。

助手席に座り、何もすることのない私はただ黙ってじっとしているだけ。

くっ、口が疼く……何か喋りたい……私あまりお喋りな方じゃないんだけど、今猛烈に何か喋りたい……否、言葉を発したい……！

(ていうか笹森さん何か喋ってよっ！ 上司でしょーっ。こんなときこそ使うべきじゃないんですか、営業で培ったコミュニケーションスキルを！)

喋りたいという欲求がおかしな方向に作用して、笹森さんに対する苛立ちが募る。

チラリと横目でハンドルを握る笹森を見ると、相変わらず涼しい顔で進行方向を見据えている。その横顔は、確かに整っていてカッコいい。女性達が見惚れてしまうのも分かる気がする。

まあ、それは置いておいて——毎回こんなに会話がなかったら、私、後部座席乗った方がいいんじゃないですかね。

後部座席だったらほら、タクシーみたいだし。この無言地獄にも耐えられるんじゃないかと……

「おい」

ん？ 気のせいかな。今、声が聞こえたような。

「おい」

気のせいじゃなかった。

信号待ちをしている間、少し不機嫌そうに眉を寄せた笹森さんが私を見ていた。

「あっ、す、すみません。なんですか？」

まさか笹森さんの方から声をかけてくるとは思わず、びつくりした私は慌てて頭を下げる。

「なんか喋れ」

「はい？」

「さすがに二十分近く無言はキツイ」

なんだ……あなたもそう思っていたのですね。

「はあ」

「ずいぶんやる気のない返事だな」

しまった、つい地のまま返事しちゃったよ！

「す、すみません！ 失礼な態度を……」

「や、いいよ。かえって話しやすいから、そのままどうぞ」

焦って謝る私を横目に見て、やや口元に笑みを浮かべた笹森さんがそう言った。

「そ、そうですか？ じゃあお言葉に甘えて……。で、何を喋りましょう」

「なんでもいい。適当に喋れ」

適当に喋れと言われても、笹森さん相手に一体何を喋ったらいいのか……

困惑する私に、笹森さんは「何もないのかよ」と更に追い打ちをかける。

「いやその……笹森さんと私の共通の話題が見当たらないので」

「共通の話題でなくたっていいよ」

「……それじゃ余計話題がないんですけど……」

「普段女同士で何喋ってんだ？」

「え……、今話題の食べ物の話、スポーツの話、気になる異性の話、とかですかね？」

「そういう話でいいんだけど」

「それこそ困るんですけど。」

「うーん、話題話題……あ、そうだ。」

こんなふうに笹森さんと二人きりで話す機会なんてそうないだろうから、思いついてみんなが気になっていようことを直接聞いてみようかな。

「あの、笹森さんはあんまり仕事以外で女性と話しませんよね」

笹森さんは、運転しながら私を横目でチラリと見る。そして、「まあな」とぶっきらぼうに返事をした。

「女性が嫌いなんですか？」

「……ゲイではない」

「それは噂で聞きました」

少しの間無言で何かを考えていた笹森さんは、はあ〜と大きなため息をついた。

この人、言葉が少ないから誤解されちゃうんだろうなあ。

「仕事以外で女性と話してるだけで噂立てられる俺の身にもなれよ」

「えっ。話してるだけで？」

「……そうだよ」

笹森さんは余程今までいろいろなことがあったのか、苦虫を噛み潰したような表情をしている。

「俺から言わせれば、ろくに話もしたことないのになんで好きとか言ってくるのか理解できない」

「それだけモテる要素が備わってたら仕方ないんじゃないですか？」

「賢いな悩みだよ。ほんと。」

「……そう言いながらお前は、冷静だな」

気がつけばお前と呼ばれていることに少し驚きつつ、笹森さんの横顔を見た。

「恋愛から遠ざかっているの、客観的に見られるのかと」

「……お前、恋愛してないのか？」

「そこ、突っ込んで聞きますか。」

自信を持って言うことでもないのに、笹森さんから視線を逸らし、俯きながら小さな声で返事をした。

「好きな人はいました。今はいませんけど」

「フラれたのか？」

「うっ、また聞かされたくないことを。」

眉間に皺が寄らないように、必死で無表情を装う。

「直接フラれたわけじゃないです」

知らず低いトーンで話す私を、さして気にも留めず笹森さんは「ふうん」と呟いた。
なんでこんなことをこの人に喋ってるの、私。相手はあの有名人、笹森さんだというのに。なんだか落ち着かなくなつて、膝の上の自分の手ばかり見てしまう。

そんなやり取りをしているうちに、取引先に到着する。

笹森さんに連れられて応接室に入ると、早速女性社員がお茶を持ってきてくれた。彼女は私の隣に座る笹森さんに嬉しそうに話しかけている。

しかし相手が取引先となると、笹森さんの態度が全然違う。表情が優しげで、声のトーンもいつもより柔らかい。

ちよつと待つてこの人誰？ これ別人？

驚いた私がいまじまじと見つめていたら、担当の男性が入ってきた。それを見て笹森さんがすつと立ち上がったので、私もそれに倣う。

「沢田さん、いつもお世話になってます」

「こちらこそいつもお世話様。笹森さんが来るつて女性社員に話したら、みんなそわそわしちゃつて大変だよ。相変わらず人気だねー。お、今日は一人じゃないの？」

「ええ、新しく配属になった横家です。横家、こちら担当の沢田さん」

「横家です。よろしくお願い致します」

笹森さんに紹介された私は、ぺこりと頭を下げた。

沢田さんは見た感じ笹森さんより少し年上で、気さくな印象の人だ。横にアシスタントっぽい女

性が座っているが、その視線は完全に笹森さんにロックオンされている。頬がやけに紅潮しているところを見ると、この人も笹森ファンに違いない。

沢田さんと打ち合わせをする笹森さんは、会社でのぶつきらぼうな彼とはまるで別人だった。笑顔と軽快なトークで相手を和ませる姿は、普段とギャップがありすぎてびっくりする。

私がポカンと呆気に取られているうちに打ち合わせは終わり、笹森さんが立ち上がった。それに気づいた私も慌てて立ち上がった頭を下げる。

取引先を出て再び車に乗り込むと、笹森さんは気が抜けたようにふう、と息をついた。

「担当の沢田さんは、気さくで話しやすい人だし、女性に対しても紳士的でいい人だから」

「分かりました。……あのつ、笹森さんつて、営業先ではいつもあんな感じなんですか？ 普段とのギャップが凄くてびっくりしました」

「……まあ。じゃないと営業務まらないし」

「普段からあんな感じで話せばもつとモテますよー」

思わず興奮気味にそう提案した私を、いつもの無表情に戻った彼が呆れた様子で見ている。

「……お前こそ、最初とは別人みたいによく喋るようになったな……」

「す、すみません、ちよつと調子に乗つてしまいました……」

「いや、いいよ。お前がどんなやつなのか、なんとなく分かつてきたわ。面白いからそのまま喋つてみな」

笹森さんからお許しが出たことで、更に私の口が滑る。

「やっぱり女性が嫌いなんですか？」

「……お前、結構大胆に突っ込んでくるな」

「なんでしよう、気になりだすと止まらない性分です」

会話を続けながら笹森さんは静かに車を発進させた。

「嫌いじゃねーよ。だけど……過去にいろいろありすぎて会社では恋愛する気にならん」

「……そうなんですか」

遠くを見つめてそう言った笹森さんの言葉に嘘はないだろうと思った。そして急に無言になった彼を見て、触れられたくない部分だったのかもしれないと後悔する。

重苦しくなってしまったこの空間をどうにか明るくせねば、と必死で考えて、私の口から出た言

葉は――

「じゃ、じゃあ、会社の外ではブツ飛んじゃってる感じなんですね！」

「……は？」

ちようど信号待ちで車を停車させた笹森さんが、ぎよつとしたように私に向き直った。

うわっ……私、またやらかした……

「い、いやあの、しゃ、社内が無理なら社外で、みたいなの？」

やらかしてしまったことを笑って誤魔化そうと、無理矢理笑顔を作ってみる。

「お前、どうやったらそういう発想になるんだ？」

笹森さんが感情をなくした表情で私を見る。

「だって……もつたいないじゃないですか。笹森さん見た目だけは凄く良いから！」

「今お前、さらっとバカにしただろ」

「してません。本心です。私なんて全っ然モテないから、モテるのにその権利を捨ててる笹森さんに納得がいけないんです。つてもう、なんで私モテないことを笹森さんに暴露しているんです……」

結果的に墓穴を掘ってしまったって、なんだか落ち込んでしまった。

「まあまあ。元氣出せよ」

がっくりと項垂れた私を、笹森さんが慰めてくれた。

「しかし、お前、そんなにモテないのか？」

「モテませんよ。じゃなきゃ今頃、彼氏の一人や二人できてるはずですよ」

「縁がなかっただけじゃないのか」

「……そうかもしれない。というかそう思いたい……」

ふと笹森さんが呟いた。

「縁がなかったのは俺も一緒だな」

笹森さんはそう言って再び車を発進させた。そして私の方を見ずに、

「お前にもそのうちいい相手が現れるさ」

と、優しい口調で言った。これって慰められてるのかな。なんか、複雑な気持ち……

自分がモテないなんて話、するつもりなかったのに、笹森さんがなんだか辛そうな顔するから、

つい余計なことまで言ってしまったじゃないか……もう、後悔しかない。

それにしても、あんなにモテる笹森さんにも、会社で恋愛したくなくなるくらい辛い過去があったのか。

やっぱり、想像していたのと違うな……

それから二人とも口を開かなかったけど、帰りの沈黙は行きほど居心地は悪くなかった。

取引先から戻った私は、事務作業に勤しむ。少しずつではあるが仕事にも慣れてきた。今はとにかく間違えないようにと集中して伝票処理をしていたら、すぐ後ろから突然笹森さんに声をかけられた。

「横家」

「へいっ！」

びっくりして勢いよく返事したら、間違った。

斜め後ろにいた吉村さんが「ぶはっ!!」と噴き出したのが聞こえて、恥ずかしくて顔が熱くなってくる。とにかく今は笹森さんに謝らなければ。私は立ち上がると、デスクに手をついて下を向いている笹森さんに頭を下げた。

「すっ、すみません笹森さん、間違えました！ 決してふざけているわけでは……」

笹森さんは大きな掌で顔を押しさえたまま動かない。これは……ヤバい、怒られるかな……とところが次の瞬間、笹森さんが噴き出した。

「ふ、ふはっ、ははははははっ!!」

「！」

さ、笹森さんが笑っている……!

もちろん驚いているのは私だけではない。部内の女性陣も、みんな衝撃を受けたように笹森さんを見つめている。驚いている私達を尻目に彼は笑い続ける。

「お、おま……へいっ……て何……江戸っ子か……」

苦しそうにお腹を抱えて、笹森さんは目元の涙を拭った。

ひーひー言いながらひとしきり笑うと、笹森さんは「す、水分……」と言って給湯室に消えた。

結局なんの用だったんだろ……

「ちよつと横家さん！ 凄いやじゃない、どうやって笹森君を手懐けたの？」

興奮した様子の吉村さんが、ガラガラとキヤスター付きの椅子に座ったまま近寄ってきた。

「え？ いや、何もしてませんけど……」

「笹森君があんなに笑ったの久しぶりに見たわ！ きつと明日には社内はこの話題で持ちきりね」

「えっ、そんなまさか……」

「甘いわよ！ 笹森君が女性と会話してあんなふうに爆笑することなんて、この数年なかったんだから。それに彼、横家さんのこと『お前』って言ってなかった？ やっぱり私の目に狂いはなかったわ〜」

「い、今の会話になってました？」

困惑する私をよそに吉村さんの興奮はなかなか鎮まら^しない。
その後なんとか業務に戻ったものの、周りから向けられる数々の視線が痛くて、仕事が全然手につかなかった。

昼休みになると、吉村さんに「横家さん、お昼一緒に食べようよ」と誘われたので、人がほぼ出払った営業部のフロアでランチをとることにした。

「やっぱり笹森君には横家さんみたいな人が合うのかもねえ〜」

吉村さんは自作の弁当を食べながら嬉しそうにそう言った。私はコンビニで買ってきたサンドイッチとおにぎりを広げ、いやあ……と誤魔化すようにこめかみをポリポリ掻く。

「吉村さんは笹森さんと私をどうしたいのですか？」

「ん？ あわよくばくつついてくれないかなって！」

かなって……そんな楽しそうに言われても困ります……

つつい笑い顔の吉村さんとは対照的に顔が引きつってしまふ。

「……やめてください。社内の女子社員全員を敵に回したくありません」

そうよねえ、と吉村さんは笑いながら弁当に視線を落とした。

「私ねえ、笹森君の一年先輩なんだけど、ずっと同じ部署だから今までいろいろ見てきたんだよねえ」

「いろいろ？」

吉村さんの言葉に、先日の出先でのことを思い出した。

「うんまあ。笹森君がはつきり言ったわけじゃないから私の憶測も入っているだろうけど。彼って今はあんなんだけど、入社した頃は普通に女性と話してたし、凄く優しかったのよ」

「へえ……」

そうなんだ。

「だからさつきみたいに笹森君が横家さんと仲良く話してるのを見ると、昔の彼を見るようでさ、ちよつと嬉しくなるんだよね」

そう言って吉村さんは可愛らしく微笑んだ。

こんなふう言ってもらえる笹森さんって、本当はどんな人なんだろう。今までは彼に興味なかったのに、なんだかちよつと知りたくなってきた。

「笹森さんって……実は、いい人なんですか？」

「そうよ。とつてもね。なに？ 好きになり始めてたりする？」

吉村さんがやけに楽しそうに身を乗り出してくる。

「いやいや、それはいいですよ」

こればっかりはどうしようもない。個人の好みの問題だし、自分は優しい人が好きなのだ。笹森さんが冷たい人じゃないと分かったけど、だからといって好きになるわけじゃない。

そりゃもちろん、あんなイケメンだし、何かきっかけがあれば変わるかもしれないけど……
なーんて。こんなこと前は露^らほども思っていなかったのに……

そんなふう考えてる自分にちよつと驚いてしまった。

昼休みが終わりに近づくと、昼食を外で済ませた社員達がフロアに戻ってきた。

「おい、横家」

私のもとに、外で食事を済ませてきたらしい笹森さんがやって来る。

今度こそヘマはするまいと、しつかり「はい」と返事をする、彼は私を見て苦笑した。

「さっきはヤバかった。ツボに入った」

「なんかすみませんでした……」

さすがに申し訳なく思つて、軽く頭を下げた。

「まあ、大した用じやなかったんだけど。仕事に慣れたか、聞こうと思つたんだよ」

「ああ、そうでしたか。ありがとうございます。周りの皆さんの手助けもありまして、だいぶ慣れました」

「うん、横家が作った会議の資料良かったよ、見やすくて分かりやすい。それに伝票の処理速くて助かってる。溜め込まないし」

もしかして、褒められてる？

「これからは俺がやってた分の仕事、もっと回していくわ」

「分かりました」

私が頷くと、「じゃ、早速だけこれよろしく」とファイルを渡された。

「ああ、そうだ。お前これ読むか？」

そう言つて、笹森さんが私の目の前に新聞を差し出した。

見るといつも私が読んでいる経済紙だった。

「いいんですか？ 今日まだ買ってなかったんです」

「前、屋上で読んでただろ？」

「えっ、覚えてたんですか？」

「屋上で新聞読んでる女性社員なんて珍しいからな」

「それって、私がオジサン臭いって言いたいんですか？」

笹森さんから新聞を受け取りつつ上目づかいに眺む。すると、笹森さんは口角を上げてニヤリと笑つた。

「いや？」

しまった。

不覚にもその笑顔にちよつと胸がきゅんとなつてしまった……

翌日出社すると、社内の様子がいつもと違う。

いや、違うのは私を見る女性社員の視線か……

なんだろう、憎しみや妬みまではいかないけど、好奇とでもいうべきか？ 通りすがりにチラ見されている。

「横家せんばーい！」

振り返ると、総務で一緒だった風祭美香ちゃんが笑顔で手を振りながら駆け寄つてきた。

美香ちゃんは、先日デスクで笹森さんにフラれてしまったと嘆いていた子だ。

身長は私より小さくて、たぶん百五十五センチくらい？ お洒落でイマドキの子だけど、仕事に取り組む姿勢は真面目だし明るく元気で私は好きだった。

「美香ちゃん、久しぶり」

「お久しぶりです。それより、先輩ちょっとここに」

美香ちゃんに腕を引つ張られ、自販機の近くの休憩スペースに連れて行かれる。なんだろうと思っていると、美香ちゃんが神妙な面持ちで話し出した。

「先輩……笹森さんと噂になってるんですけど、付き合ってるって本当ですか？」

「はっ!？」

うわー、吉村さんが言ってた通りだ。

少しゲンナリしながら美香ちゃんと向き合った。

「……それって笹森さんが笑ったから？」

「えっ？ なんですかそれ」

美香ちゃんもわけが分からないようだったので彼女に昨日の出来事を話す。すると、「え、それだけ？」と拍子抜けしたような表情をした。

「私、もう付き合ってるって聞きましたよ？」

「そんなバカな……異動して一週間だよ？ 仕事忙しいし覚えることたくさんあるしで、それどころじゃないよ。大体、笹森さんが私なんかを相手にするわけじゃないじゃん」

そっかあ……と美香ちゃんは腕を組んで首を傾げる。

「さすが社内ナンバーワンのモテ男、笹森さんですね。女子の注目度が半端ないです」

「本当にね。それより美香ちゃん、先に謝つとく、ゴメン。私、総務にいたるとき、美香ちゃんが笹森さんにフラれたって話聞いちゃったんだ」

そう言つて、私は頭を下げた。

「ああ、横家先輩、席近かったですもんね。全然問題ないです。あれは熱に浮かされたようなものでしたから。もう忘れましょう」

意外なほど美香ちゃんはケロリとしていて、ちょっと驚いた。なんて切り替えの早い。

「それどころか、私、笹森さんの相手が横家先輩だって聞いて、納得しちゃいましたもん」

「へっ？ なんで？」

「笹森さんは確かにステキですけど、彼に寄ってくる女の人ってみんな女子力高めで自分に自信のある人ばかりなんですよね。あの人達、フラれた子達のこと、いつもさまあ、みたいな目で見えてすっごい頭にきてたんです」

美香ちゃんは嫌なことを思い出したのか、顔が般若みたいになっている。

「そこにきて笹森さんと横家先輩がペア組んで、恋の噂まで立っただじゃないですか！ さっすが笹森さん、見る目あるって思いましたよ。逆にあいつらさまあ、ですね！」

クッククック、と笑う彼女は非常に不気味だった。

「美香ちゃんごめん。言ってることがさっぱり分からない」

困惑して言うと、美香ちゃんは私の肩を勢いよく掴んだ。

「私、横家先輩のこと尊敬してるんです。先輩の面倒見いいし、人によって態度変えないから。笹森さんが自信満々の女の友達じゃなくて横家先輩を選んだっておかしくないですよ」

「えー、さすがにそれはないでしょう?」

「そんなことないです! 横家先輩ほぼ素っぴんなくらい化粧してないのに綺麗じゃないですか! スタイルだっていいし、もうちよつと自分の魅力に自信持つてくださいよ!!」

美香ちゃんにガクガク体を揺さぶられる。

「いや、でもさ……私なんてモテないし」

美香ちゃんは否定するように首をぶんぶん横に振った。

「それは野郎共に見る目がないから! あいつらは手の届かない美人より手の届く隙がある女を選ぶんです」

「へ、へー……」

彼女の力説ぶりに気圧けおされてしまう。

「横家先輩なら笹森さんとお似合いですよ。なので、笹森さんと付き合うことになったら教えてくださいね! 応援しますから」

そう言つて美香ちゃんは力強く私の手を握り、笑顔で去って行った。

「あは……」

美香ちゃんつたら気を遣つてくれて……まあ確かに最初より笹森さんに対するイメージは良く

なつてるけど、でも本当になんにもないんだけどなあ……

出社して、給湯室でコーヒを淹いれていたら、笹森さんに呼ばれた。

「横家、ちよつと」

急いで彼のデスクまで行くと、笹森さんは引き出しから新幹線の切符を取り出した。

「また取引先と一緒に旅行してもらいたいんだけど、ちよつと遠いから出張扱いになる。日帰りだけだな。明日の朝新幹線のホームで待ち合わせな」

「あ、はい。分かりました」

ホイ、と新幹線の切符を渡され、思わずじつと切符を見つめる。

笹森さんと二人きりか……会話、もつかな。

「明日の天気かなり悪いみたいねえ……午後から雪だつて」

吉村さんがそんなことを言いながら、ふらりと近寄ってきた。

「えつ、そうなんですか?」

「うん。もしかして新幹線運休になつちよつたりして」

「そんなくまつさか」

私はアハハと笑い返したが、この後、そのまさかの事態おちいに陥るなんて思つてもいなかった。

「……お前さあ、厄年？」

視線を前方に向けたまま笹森さんが口を開いた。

「いえ……」

「じゃあ朝のテレビ番組の占い何位だった？」

「九位でした」

「微妙……」

「そういう笹森さんは何位なんですか？」

「……俺八位」

「そっちだつて微妙じゃないですか……」

出張先での仕事を終え、立ち寄った食事処^{じしょ}。その店先で、私と笹森さんは、足元に降り積もる大量の雪を見ながら立ち尽くしていた。

朝、笹森さんと新幹線のホームで待ち合わせた私は、さほど会話も盛り上がりがないまま目的地に着いた。

取引先では、頬を赤らめ嬉しそうに歓迎する女性社員と、ぼつちり営業モードに切り替わって世

間話をする笹森さんを、げんなり眺めつつ、同席。

順調に話は進み、ちょうど昼時なのでよかつたら……と、先方のご厚意で昼を食べに行くことになった。

そして食事を済ませ、取引先の方とはここで別れ、さあ帰ろうと外に出ると猛吹雪^{もうふぶき}と一面の銀世界。

立ち尽くした二人の会話が、さっきのやりとり。

駅に来てみれば案の定、新幹線は全線運休になっていた。

だが、この状況においても笹森さんの行動力はさすがだった。

彼は会社に連絡して翌日の有休を申請した後、ホテルを段取りよく手配した。

駅で行き場をなくした人達を横目に見ながら、一緒に来たのが笹森さんで良かった、と安堵している自分がいる。

笹森さんに連れてこられたのは、駅と直結したシティホテル。しかし、その洗練された内装は、明らかに手頃なビジネスホテルではない。

「……笹森さん、こないいいホテル取ったんですか？」

想定していなかったのでもちよつと困惑気味に前を行く笹森さんに問いかけた。

「ああ、俺この親会社の株持つてるから、優待で通常より安くなるんだよ」

「株っ!？」

思わず株に反応してしまう自分が悲しい。私の勢いに笹森さんはほんの少し、仰け反^{のぞ}る。

「突っ込むとこ、そこ？」

「あ、すみません。でもいいんですか？ 私までご一緒しちゃって」

「俺が勝手に決めたんだからいいって。このホテル、駅ビルに直結してるから外に出なくてもいいし、食事処じしょもたくさんあるから便利なんだよな。何回か泊まったけど、部屋も風呂も広くて綺麗でいいよ」

「あ、ありがとうございます……」

「笹森さん、いい人だ……」

「とりあえずもうチェックインできるみたいだから部屋に行こう。しばらくは自由にしていいけど、十八時には夕飯行くから部屋にいろよ」

「何気なく夕飯行くからなんて言われてぎよつとする。それが顔に出ていたのか、彼は一瞬ムツとした。」

「……何？ 俺と飯食うの嫌なのかよ」

「いえっ、決してそういつたわけではなく！」

「イヤイヤと手と首を振って全否定した。」

「嫌ではない。けど、笹森さんと二人で食事だなんてそりゃ戸惑うでしょ。」

「一人で夕飯なんて忤わづしいだろうが。せつかく、普段なかなか来られないところに来たんだ。名物食べなきゃ気が済まない」

「名物……なるほど。それは確かに一理ある。」

「そうですね……食べましょう名物！」

「笹森さんはそんな私を見てフン、と鼻で笑ってフロントへ歩き出した。」

「チェックインをして、カードキーを受け取りエレベーターで客室に向かう。」

「なんか……笹森さんとこの空間にいるのがまだ信じられないなあ。もちろん仕事だし、状況が状況だから仕方ないんだけど。」

「お前、泊まりの準備してきた？」

「いえ、してません。部屋で少し休んだら駅ビルに買い物に行ってきます」

「そりゃそうでしょう。日帰りの予定だったんだもの。」

「俺は念のため泊まりの準備してきた」

「えっ！」

「天気予報見て嫌な予感したからな」

「昨日、吉村さんに天気予報を聞いたとき、大丈夫だろうと高を括くっていたことを今になって後悔する。」

「がっかりしていたらチン、と音がしてエレベーターが客室フロアに到着した。」

「笹森さんが自分と私の客室の番号を確認する。」

「隣の部屋だな。お前、駅ビル一人で行けんの？」

「たぶん。方向音痴ではないので」

「すると笹森さんが胸ポケットからカードケースを取り出し、そこから一枚の名刺を抜くと私に差

し出した。なんだろうと思い、笹森さんを見上げる。

「何かあったら連絡しろ」

「あ、はい。ありがとうございます」

受け取ってよく見たら、笹森さんの携帯電話の番号と、携帯のメールアドレスも記してあった。うわー、社内の女性社員が喉から手が出るほど欲しがりそうな個人情報ゲットしちゃったよ。

私はその名刺を大事に財布にしまった。そうして笹森さんと別れ、今晚泊まる客室のドアを開ける。

「ふおおおおお……」

私の目の前に広がるのは、シングルにしては広い部屋だった。キレイにベッドメイクされた清潔感たっぷり大きなベッドと、大きな窓から見える真つ白な外の景色。

バスルームも覗いてみると、家のよりよっぽど大きなバスタブがあった。洗面ボウルの脇には自然派で名の知れたブランドのアメニティがずらりと並んでいて、一気にテンションが上がる。

部屋キレイ……っ、それになんて寝心地の良さそうなベッドッ……！

トイレもバスルームも広いし、素敵……！ こんな部屋に泊まるの初めて！

興奮して子供みたいにベッドにバフツとダイブした。真つ白なりネンの肌触りが最高に気持ちいい。

ああ疲れた……このまま眠りたい……けど、下着と化粧品買ってこなきゃ……私、肌が弱いから使える化粧品って限られてるんだよね。

気合でなんとか起き上がり、私は必要最低限の荷物だけ持って部屋を出る。

ホテルから直結の駅ビルには、いつも使ってるコスメが売っていなかった。仕方なく足を伸ばして、ホテルの近くにある百貨店まで行く。フロア案内を見ると、いつも使ってるメーカーのカウンターがあった。ほっとして、トリアルキットを購入する。

すると、対応してくれたビューティーアドバイザーさんが、私のほぼ素っぴんの顔を見かねたのか、下地から仕上げまでひと通り化粧してくれた。

薄く引かれたアイラインと、ひかえ目なアイシャドウでいつもより目が少し大きくなった気がする。ほんのりのせられたチークで血色がよく見えるし、普段はあまり使わないローズ系のリップを塗られたら、なんだか女っぽりが上がったような気がした。いかに普段の自分が化粧をサボっているかが、浮き彫りにされた……。モテない以前に、女子として終わっている……！ アドバイザーさんも張り切ってくれたし、ちょっと反省しなきゃ。

その後、私は再び駅ビルに走り、ランジェリーショップで下着を買おうと、ホテルに戻った。気づけばあつという間に夕食に行く時間が迫ってきている。

急いで荷物の整理をしていたらドアをノックする音がした。

はい、と応えてドアを開けると、もちろんそこには笹森さん。

だが彼は、私を見るなり一瞬動きを止めた。

——ああそうか、さつき化粧してもらったから。

「さつきコスメカウンターで少し化粧してもらったんです。変ですか？」

「……いや、変じゃない。行くぞ」

ふいっと顔を背けて笹森さんは歩き出す。

……やっぱり変だったのかな？

そう思いながら先に行く笹森さんを追いかけた。

そして連れてこられたのは、ホテル内にある、見るからに高級そうな和食処。予約していたのか、和服を着た店員さんにスムーズに席に通された。

「なんか立派なお店ですねえ……」

自分ではなかなか来ないような雰囲気のお店に、緊張してキョロキョロ周囲を見回す。

「ここ旨いよ」

笹森さんは慣れている様子で、メニューを手に取った。

「笹森さんはこのお店は何回も来てるんですか？」

「ああ。こっちに出張する度に來てるな」

なんとというか……目の前の、物慣れた様子でメニューを見てる笹森さんは確かに格好いい。オーダーを取りに来た店員さんも、目をキラキラさせて笹森さんに話しかけている。私なんて空気だと思われているよ。いや、むしろ何でこんな女連れてんだって思ってるかもしれない。

そんなことを思っていたら、ふと笹森さんと視線がぶつかる。

「で、お前、何食べる？」

「お、お薦めってなんですか？」

「コース」

「じゃそれで。……ってコースっていくら……げえ!! 高っ!!」

「こちらのコースお願いします」

笹森さんは値段に驚く私に構わず、さらりと注文してしまった。

「さっ、笹森さん！」

こ、こんな高いコース、経費で落とせるかどうか……

そんなことを考えて一人で焦る私に、笹森さんはニッコリ笑った。

「ここは俺のおごり。俺が食べたくて連れて来たんだから、お前は気楽に付き合え」

「い、いやでも、こんな高いものおごつてもらっちゃつていいんでしょうか……」

「日帰り出張に付き合わせた挙句、こんなことになった、せめてもの詫びだ」

「あ、ありがとうございます……」

イケメンの笑顔は最強だ。そんな優しく微笑まれちゃうとこっちは何も言えない。

そして運ばれてきた食事は、もうどれもこれも美味しかった。

新鮮なお刺身に、牛肉の朴葉味噌焼き。更に、蒸した蕪に蟹のあんかけ。季節の野菜の天婦羅に茶碗蒸し。そして蟹の身が入った炊き込み飯と上品な味のお吸い物。メのデザートは抹茶アイス。

口に運ぶ度に感動して「くう〜」とか「ぬう〜」とか変な声を出して悶絶してしまった。

その都度、笹森さんは声を殺して笑っている。

「お前、ホント面白すぎ……」

涙目でそう言う笹森さんに言ってやりたい。

あなたは格好良すぎ。

ご飯を食べる所作も見惚れてしまうほど綺麗だった。この人、欠点はないんだろうか。変に笹森さんを意識して緊張した私は、食事と一緒に頼んだビールをいつも以上にぐいぐい飲んでしまう。空きっ腹に沁みてほどよく酔いが回ってきた。

「うーん、笹森さん、私なんだか凄く気分がよくなってきたてしまいました」

「いや、お前それ普通に酔ってるだろ。大丈夫かよ。そろそろ酒やめとけば」

笹森さんが私の前からビールをどかさうと手を伸ばしてくるけど、私はとっさにジョッキを手にしてそれを阻止した。

「はいここで質問です！ 笹森さんは何で社内恋愛しないんですかあ？」

「……お前、何を聞いてくるかと思えば……」

明らかに酔っぱらい始めた私の言動に、笹森さんは呆れた様子のため息をついた。

「格好いいんだから、寄ってくる女の子みんな食べちゃえばいいのに」

「お前、かなり酔ってるな」

食事を終えた笹森さんは、私が食べ終わるのを待ちながら冷酒をちびちび飲んでる。

「じゃあ、笹森さんはあ、何で女の子に冷たいんですかあ？」

あ、私、どさくさに紛れてとんでもないことを聞いている……

そう思ったけれど、理性に反して酔っぱらった私の口は止まらない。

「……冷たいか？ 普通に話してるつもりだけど」

「冷たいですよーみんな言ってます」

「いいんだよ。冷たいって思われてる方が楽だ」

「もっ!!」

私がいきなり奇声を発したので、驚いた笹森さんはビクツとした。

「もったいなくて!! 笹森さん意外といい人なのに、そんなふうに誤解されたままなんて納得できません」

自分の言いたいことだけ言うと、私はビールをグビグビ呷った。

「……ふうん、俺って意外といい人なんだ？ それはお前の評価？」

「そうですねよっ。仕事もできるし見た目も良くて頭も……って大学どこですか？」

「慶成大学」

「わああああ……ありえない!」

笹森さんが告げた大学の名は、私立ではトップクラスの名門大学だった。

神は二物も三物も与えるのかと頭を抱えた私を、笹森さんは面白そうにニヤニヤしながら眺めている。

「お前面白いなあ……社内にこんなのがいたなんて、大発見だ」

「大発見って珍獣ですか。どうせ私はこんなんですよ。だからモテないんです」

さつきまでテンション高めだったのに、自虐発言をした途端テンションがだだ下がりになる。

「モテないって、前にもそんなこと言ってたけど嘘だろ」

「いえ、本当にモテないんです。お付き合いだってしたことないし」

「……まさか、今までに一度も彼氏がいなかったってことは……」

「そのまさかですが、何か!？」

笹森さんの動きが一瞬止まった。そして真剣な表情で私の顔をじっと見つめる。

「え……だって、お前いくつよ」

「二十六ですけど……」

そんな真剣に聞かれたら、恥ずかしくって俯うつむくしかない。

酒、酒をください！

「……は、マジか……」

笹森さんが驚いた様子で椅子に背を預けた。

思いっきり引かれてる——そう思った私は、羞恥しうちのあまり目の前にあったビールジョッキを一気飲みした。そして、飲み終えたジョッキをドン！とテーブルに置く。

「さっ、笹森さんのほかあ!! 聞かれたから答えたのに、そのリアクションは失礼ですっ!!」

「お、おお、悪かった」

さすがに悪いと思ったのか、笹森さんはテーブルに突っ伏してさめざめと泣く私の肩を慰めるように、ポンポン叩いてくれたり、優しくさすってくれたりした。そんなふうにされるうちに、だんだん気持ちが悪く落ちてきた。

「よかつたら場所変えないか? もうちよつと落ち着けそうなところに行こう」

「は、はい……」

そうして笹森さんに連れられて行ったのは、ホテルの最上階にあるバーだ。

いかにも大人の空間といった落ち着いた雰囲気の内には、カッブル数組と女性だけのグループが数組。

大きな窓の向こうには美しい夜景が広がり……つて、今晚は猛吹雪もうふうかきだから夜景はお預け。本来ならパノラマのように広がる夜景が見えて、お洒落しゃれなムード満載だろう。

私達はカウンターに座り笹森さんはウイスキーの水割り、私はお任せでアルコール少な目のカクテルを注文した。

「ちよつとは落ち着いたか」

「はい……すみませんでした」

ずびび、と鼻をすすり頭を下げた。泣いて取り乱したことが恥ずかしくてまた俯うつむいてしまう。

長い足を組んで椅子に腰掛けている笹森さんを、バーの女性客達がチラチラと見ている。

普通のスーツを着て座っているだけなのに、どうしてこども絵になるのか……彼女達が見てしまいう気持ちも分かる。

それに引き換え私はグレーのジャケットと膝丈のプリーツスカートに、黒のVネックのカットソー……。なんか、こんな私が隣でごめんなさいと言いたくなってしまふ。

笹森さんが喉を鳴らして水割りを飲むと、正面を向いたまま話し出した。

「その……あれだ。さつき驚いたのは、お前を馬鹿にしたわけじゃないから」

「……じゃ、どういうことですか？」

「そこはお前、察しろよ」

笹森さんは前を向いたままだ。

「よく分かんないです」

「じゃあ分かんなくていい。……で、告られたこともないのか？」

「……昔、一度ありましたが、好きじゃなかったたのでお断りしました」

「そうなんだよ。大学の頃好きだと言ってくれた奇特な方がいたのだ。なのに私ったらお断りしてしまっただのよね。二十六まで彼氏ができないと分かっていたら、あのとき断らなかつたのになあ……」

「お前自身は？ 会社とかプライベートで好きなやついなかったのか？」

「学生時代は、好きな人はいっても告白できず、会社では……好きな人はいたけど間接的にフラれちゃって」

はあくのため息をついて、オレンジジュースベースのカクテルに口をつけた。

「なんでだろ……。なんでモテないのかなあ……。笹森さんはあんなに冷たくしてても女の子がたくさん寄ってくるのに」

酔っ払っているせいか、出てくるのは愚痴ばかりだ。

それもこれも、なんだか愚痴を零してもいいような雰囲気を作っている笹森さんのせいなのかも

しれないけど。

「たくさん寄ってきたからって、嬉しいかって言われりゃ嬉しくないけどな」

笹森さんが持つてるグラスの中で、氷がカラン、と音を立てる。

「笹森さんは贅沢ですよ」

完全に拗ねモードまっしぐらな私。

「モテる人もなかなか大変なんだよ」

静かな口調で笹森さんが苦笑した。

そんな笹森さんを見ていて、吉村さんが言っていたことを思い出す。

——傍から見ているなら、選り取り見取りでいいことばかりのように見えるけど、その立場にならないと分からないこともあるのかもね。

過去にいろいろあったのだろうと窺わせる雰囲気、私は口をつぐんだ。

「しかし、そんなにモテたいもんかね？」

不思議そうに首を傾げる笹森さんを見て、大きなため息をつく。

「別に誰にでもモテたいわけじゃないですよ。ただ、この年まで彼氏の一人もいないと、不安になるんです。恋の仕方とかも分からなくなってくるし、一生一人だったら……とか考えちゃいますもん」

「俺は一人でも構わないけどな」

「わ、私は嫌です！ 一生一人なんて……考えただけでも嫌ですう〜」

アルコールのせいか涙脆なみぢくなっていて、気がつけば目からははらと涙なみだが零こぼれてくる。

「おいおい……お前、酔うと泣き出すタイプか」

笹森さんは少々困り顔で、私の背中をポンポン叩いた。

「いつか現れるって、いい男が」

「いつかっていつですか……私、このまま一生男を知らずに生きていくのかなあ……」

そんな私の呟つぶやきに笹森さんが目を見開いた。

「……そんなことねーって」

「だってこのままでと本当に縁がなさそうだから……」

「そんなの分からないだろう？ 突然出会いがあるかもしれないねーし」

「でもそんないつ来るか分からない出合いを待ってたら、おばあちゃんになっちゃいますよ……」

笹森さんは、私の嘆なげきに何かを考えるかのように黙り込んだ。そして水割りを一ひと口飲むと私の方に向き直る。

「それは遠回しに俺を誘ってるのか？」

思いがけない言葉に私は目を剥むいた。

「え……。ええっ!? なんでそうなるんですかっ!」

思わず笹森さんから距離を取る。

「なんとなく？ つまり今夜処女を捨てたいと」

「どうやってたらそういう解釈になるんですか!」

あまりにストレートに言われて、恥はずかしくて両手で顔を覆った。

そりゃ、気にはしていたけど……笹森さん相手にそんなこと考えたりしないよ!!

そこでバーテンさんの存在を思い出した。慌あわててバーテンさんを見れば、離れたところで違うお客様の相手をしている。よかった。聞かれてなかった。

「大丈夫だって。俺だって周りは見てるよ」

私の挙動不審な動きを見て、笹森さんはクッククックと肩を震わせる。

「さっ、笹森さんが変なこと言うからですよっ」

「俺は構わないけど」

——はっ？

「じゃあさ、今夜俺とセックスして処女捨てるのと、十年後、見合い結婚で十歳年上のおっさんとセックスして処女捨てるのどっちがいい？」

笹森さんの一言に頭の中が一瞬真っ白になった。言われた言葉の意味がよく分からない。

「……………え」

酔っ払った上に、混乱して思考力の落ちた頭で必死に考える。

そんな、そんなの……

「さ、笹森さん……の勝ち……」

「ブッ!!」

笹森さんが再びお腹を抱えて笑い出した。

だって！ そんなのどう考えたって笹森さんの方がいいに決まってるじゃん！！

「セックスしたことないんだったら、まず俺と経験してみたらいい」

「ええっ!？」

あまりに驚きすぎて、口を開けたまま笹森さんを凝視する。

「経験したいんだろ？」

再び確認するように、笹森さんは首を傾げて私の顔を覗き込んできた。

「でっ、でもでもでも!! 私、その、体だけの関係とかには抵抗があるしっ」

「なら付き合う？」

「え……えええっ!!」

あっさり言われた言葉に顔から火が出た。

「さ……笹森さん、社内恋愛しないって言ってたじゃないですかっ」

こんな状況に焦りまくる私とは対照的に、笹森さんは静かにグラスを傾けて余裕の顔だ。

「だから、社外で、だ。会社内では今まで通り、ただの上司と部下だよ」

「私のこと好きでもなんでもなくせに……」

「それでもねえよ」

笹森さんは水割りを飲みながら表情を変えずにさらりと言う。

それでもないって……つまり笹森さんは、私に対して好意を持っているってこと？

「嘘だ……」

カクテルが入ったグラスを持つ手が、微かに震える。

「誘われて嫌な気はしなかった。それが答えだよ」

「っ、だから、誘ってないですってば!!」

「じゃあお試し期間でも設けるか？ それなら、嫌だったら関係を終わりにすればいいし、気楽だろ？」

お試し、という言葉に、私の心臓がドクン、と大きく跳ねた。

……私の人生で未だかつてなかったようなことが現実で起きている。

でも、いつになるか分からないならこの機会に経験するのもありなんじゃない？ しかも相手は

イケメンの笹森さんだし、こんな機会この先二度とないかもしれない。

……それに、今日一緒に過ごしてみても、笹森さんが、優しくていい人だって分かった。彼に初めてをもらってもらえるなら、私、きっと後悔しないと思う……

「……ほ、ほんとに私でいいんですか……?」

「いいよ」

訝しげに笹森さんを見ると、彼は優しく微笑んでいた。

そんな顔を見てしまったら、嫌ですなんて言えない。むしろ、嬉しくなる……

はっ、待てよ。もしかしてこれ、笹森さんからかわれている？ 処女だから遊ばれているの

か……?」

「からかってねえよ」